

樟木館日和

しゅもくかんびより◆第六号

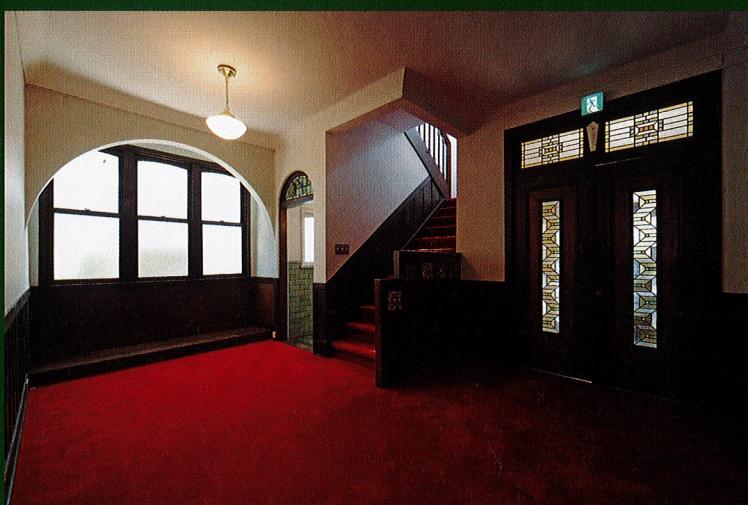


発行日:2012年9月25日
発行:文化のみち樟木館



この館は、生きている。

文化のみち樟木館。陶磁器の貿易商として活躍した井元為二郎が、大正末期に建てた邸宅。昔も今も変わることなく、スティンドグラスを通して美しい光が館内に差し込む。



生き続ける館

米寿を迎えた樟木館

「文化のみち樟木館」はアメリカを中心とした輸出陶磁器メーカー、貿易商(井元商店)の井元為三郎が和洋併置の私邸として建て、和館は大正一四年(1925)に上棟され今年で88年目の「米寿」になります。

8という数は尾張を表し、名古屋市の市章とされ、象徴し人にも物にも「末広がり」の縁起の良い数です。

この節目の年から新たな気持ちで皆様に、都会の癒しのオアシスとして愛され、役に立つ「文化のみち樟木館」を目指して行きたいと思っています。



(裏面)の棟札
棟木に取り付けられた大正14年銘

世界に誇る木の文化

日本は米の文化と言われますが、木の文化でもあります。法隆寺は修理、改修が繰り返され、1340年余年前の世界最古の木造建築と言われ、世界最大の高さ49米の東大寺大仏殿も造り出しました。

名古屋城天守でも木造部は40米近くに及ぶ高さを誇り、日本の木造建築技術は世界最高の水準に達しました。武家の住居は平安時代の寝殿造りが基になり、室町後期の禅宗寺院の書院を武家の住居に取り入れた武家書院造を生み出しました。

明治以降は一般庶民も書院を造ることが可能になつて、從来の形式を守りながら数寄屋、西洋文化(ガラスなど)を取り入れた書院座敷の工夫がなされ、樟木館

が建てられる頃には複数の形が造られました。

その後も更に工夫された庶民の書院座敷が造られると思われましたが、昭和16年(1941)の太平洋戦争でその道は途絶えてしましました。

「町並み保存地区」では樟木館、二葉館、旧豊田佐助邸、旧春田鉄次郎邸などにこの時代の書院座敷の形態を見る事ができます。



家として生長する木

日本の建築は木を材料として使うと言うより、建物に植え替えて育てるという意識で建てられ、呼吸をし成長していく木は春夏秋冬の最低一年間は移植した建物で馴らして竣工させました。

樹齢300年、1000年の木で建てた建物はその樹齢は持つとされますが、人と同様に木も歳を重ねますと傷み(いたみ)が生じてきます。

人がこの傷みを和らげるために、接ぎ木、当て木などの手当をすれば再び息を吹き返します。

樟木館は何代もの人の生活を見守り共に生き、いまだ寿命は来ておらず、草木と共に姿を変え成長する庭園と一緒にこれからも皆で見守り、優しく語りかけ接すれば、末長く生き続けて行くことでしょう。

夏を快適に過ごすため風通し良く開放的に造られた和館

の室内から自然の風景を写した日本庭園を眺めていると、なぜかホッとした気持ちになり心が落ち着くのは、自然と一体化した建物だからなのでしょう。

アメリカの小住宅を写した洋館は現代生活とほど変わらない事から違和感を感じる事はないようですが、和館は年配者にとっては昔を思い出し、なつかしさを感じさせ、若者には忘れられ行く日本の生活文化の一端を垣間見千数百年の年月をかけて育まれた日本文化の知恵を少し再認識してもらえばと思います。



愛知商業高校の生徒さん達
樟木館の歴史を熱心に聞き入る



今年の六月から「文化のみち樟木館ガイドボランティア養成講座」を開き一般の方と共に県立愛知商業高校の生徒さんにも受講していただいています。

年配者が多いボランティアの中に、若い方が加わるのを嬉しく思っています。

この事で樟木館が若者と年配者の交流の場

になり、お互いに得る物

を見つけて、国境や世代を超えた人々の理解を深める場になればと思いま

異文化が同じ敷地に同居し、互いに認め、理解し合っている樟木館だからこそ、人との融和と共生のヒントを教えてくれるのではないかでしょうか。

都会の喧騒を忘れボーッと出来、喫茶室(いもどホール)でコーヒーも飲める樟木館にぜひお出かけ下さる事をお願いします。

樺木館の魅力

NPO法人樺木俱楽部理事 松原正明

今号のテーマでもある

「生き続ける樺木館」

歴史、建築、文化など様々な
方向性からその魅力を感じる

ものであるが、どの視点から考えてもそこには必ず「人」
の関わりというものがある。

数年前、この館を知るまでは歴史文化やまちづくりな
どには全く興味のなかった私が現在樺木館にここまで関
わっているのは、同じように関わっている人達のここか
ら何かを発信したいという想い、単に管理するだけでな
くこの館が地域全体の魅力の拠点として考え、まちづく
りに繋げたいという想いに共感したからでもある。

そしてそういった「想い」こそが「文化」となっていくの
ではないだろうか。

つまり「文化」というものは過去のものではなく過去の
歴史やそこに携わった人々の想いを大切にしつつも楽し
みながら新しく創造していくべきものなのある。

これまでこの館に関わってきた人々はまさにそういう
想いを抱き自由で柔軟な発想でこの館を楽しんでいた。
それこそがこの館の持つ大きな魅力であり、そこから
生まれるもののがいわゆる「文化」なのである。

現在は公の施設ということもあり、なかなか「自由で柔
軟な発想」というわけにはいかない面もあるが、それでも
単なる見学の施設などとしてではなく、様々な人々が素敵
な時間を楽しめる場所として、かつての「番茶の家」(※)
のように何かを発信し続ける場所であってほしいと願
う。そうでなければ歴史まちづくりの意味などない。
いつか名古屋の新しい文化が樺木館から誕生すること
を楽しみにしていてください。

※大正時代に長野浪山が開いたコミュニティ。
番茶を飲みながら様々な文化人や市民が交流する場となつた。



四季の庭便り（秋冬編）

樺木館の庭に自生する四季折々の草花の歳時記



樺木館(旧井元邸)の庭園は大正末期に建てられた当初からの庭木を除き、長い月日の間に自然に生えた草花も少なくないと言われ、それらのひとつひとつがゆるやかな時の流れを今なお育み続けています。
秋晴れの空にまっすぐ伸びるすすき、「度咲きの萩」、もみじの紅葉が庭を鮮やかに彩り、寒さが凍る中で咲き続ける、つわぶきや椿の差し色が、真冬の庭に凛と映えます。
都会のけん騒を忘れさせるかのよう静かに佇む館とともに、今なお変化し続ける美しい庭で、ゆったりとしたひとときをお楽しみ下さい。



平成24年度 催し物暦（4月～8月）

4／21～4／30
MO-YA-CO展覧会

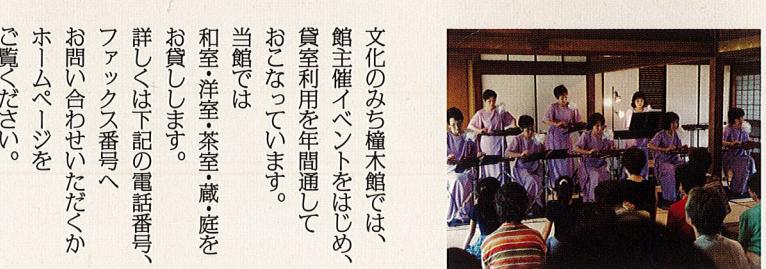
5／10～5／13
創作人形・陶・琴の調べ



8／22～8／31
柳土情が描く大鹿村と
南信州の切り絵展
NAGOYA・2012



6／1～6／3
木工家ワーキー
大正琴 初夏のしらべ
6／17



文化のみち樺木館では、
館主催イベントをはじめ、
貸室利用を年間通して
おこなっています。
和室・洋室・茶室・蔵・庭を
お貸しします。
詳しくは下記の電話番号、
ファックス番号へ
お問い合わせいただぐか
ホームページをご覧ください。